日本ロシア文学会　　関西支部　会報

発行　日本ロシア文学会関西支部事務局
住所　〒606-8501　京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科　中村唯史研究室 気付
Email　robunkansai@gmail.com
郵便振替口座　00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

◆春季総会・研究発表会の報告

2021 年 6 月 19 日（土）、zoom 開催にて関西支部の春季研究発表会ならびに総会が開催されました。

新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、今季も zoom 開催となってしまいましたが、関西支部構成員のみならず、ロシア研究を愛する多くの皆様からの深いご理解とご協力を賜り、充実したプログラムでの開催の運びとなりました。心よりお礼を申し上げます。

◇研究発表会

（1）発表者：中野悠希氏
題目：「ロシア語の斜格主体と状況語“ｐｒｉｖｉｄｅ＋生格”の意味上の主語との同一指示について」
司会：岡本崇男氏（神戸市外国語大学名誉教授）

（2）発表者：青山忠申氏
題目：「『プストゼルスク文集』ニジェゴロド写本について」
司会：中澤敦夫氏（富山大学名誉教授）

（3）発表者：杉野ゆり氏
題目：「プーシキン『青銅の騎士』における間テクスト性について：デルジャーヴィンとラジーシチェフの作品の想起を中心に」
司会：望月哲男氏（北海道大学名誉教授）

（4）発表者：深瀧雄太氏
題目：「レスコフ『不死身のゴロヴァン』における「贈与」の問題」
司会：齋藤陽一氏（新潟大学教授）

◇支部総会

◎議題

1．会員の異動（手続き中も含む、敬称略）

・入会：
田村　太（京都大学大学院 博士後期課程、推薦 ：中村唯史、服部文昭）
深瀧雄太（京都大学大学院 博士後期課程、推薦 ：中村唯史、服部文昭）

・退会：
山本法子

＊訃報：
天野和男先生（神戸市外国語大学名誉教授）が昨年 10 月に逝去。元関西支部長、顧問。その後、日本ロシア文学会を退会され、支部の会友でした。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2．2021 年 9 月からの支部長、理事候補の選挙結果（敬称略）

4 月 6 日発送、5 月 10 日投票締め切り（当日消印有効）、5 月 21 日開票
投票権を有する会員：６９名
投票総数：３７名　無効票無し
1 位 金子百合子 １７票 ＝ 次期支部長
2 位 藤原潤子 １２票 ＝ 支部長職務代行
3 位 横井幸子 １１票
4 位 ヨコタ村上孝之 １０票
以上＝日本ロシア文学会理事候補

5 位 北井聡子 7 票 ＝ 次点
6 位 五十嵐徳子、木寺律子、日野貴夫　6 票
以下散票

3．2021 年 9 月からの支部役員（敬称略）
支部長：金子百合子
運営委員：金子百合子、田中大＊、藤原潤子、横井幸子、ヨコタ村上孝之
＊（全国組織の）日本ロシア文学会から選定された編集委員の中に関西支部会員が含まれていた場合、その人に支部の運営委員に就任してもらう（日本ロシア文学会における編集委員の選出方法の変更に伴う支部規程の運用）
事務局長：藤原潤子　監事：有宗昌子、大平陽一

4．これからの関西支部の運営について
・新旧合同運営委員会（メール会議）の合意
1）支部会費を今後 2 年間は徴収しない。
2）支部会報の発行を年 1 回とする。必要時には支部会員 ML、ニューズレター等で対応。
・今後の検討課題
1）支部総会・研究発表会のあり方。
2）支部長選挙のあり方。

5．次回支部研究発表会・総会について
・2021 年度秋季は、新型コロナウイルス禍などに鑑み、開催しない。
・2022 年度の春季に神戸市外大で開催。
・対面の場合でも、原則としてリモートを併用。

◎報告
1．日本ロシア文学会の報告（全国大会、理事会など）

●2020 年 12 月理事会報告

・以前にお諮りした学生（修士）会員制度については、7 月理事会、10 月総会を経て導入の方向。
・支部会制度については、各支部の支部長・事務局による支部連絡会で検討する。

●今年度全国大会

・2021 年 10 月 29 日（金）プレシンポ、同 30 日（土）・31 日（日）本大会。
・開催校：筑波大学、全面オンライン方式。
・6 月末日を〆切として現在報告募集中。詳しくは学会 HP。

●支部連絡会

・5 月 23 日（日）オンラインで実施。関西支部からは中村が出席。
・今後の方針
1）支部制廃止という意見もあることを考慮しつつ、当面支部制は維持する
2）来年度総会まで、二年ほどかけて統廃合を進める
3）統廃合については、おおよそ北海道・東日本・西日本で 3 支部にまとめる案をたたき台とする
・支部の現状　カッコ内は（会員数／会友数）
北海道（40／0）、東北（10 程度／2）、関東（254／0）中部（31／17）、関西（83／15）、西日本（8／0）
・再編に当たっての検討課題
会友制度を持つ支部と持たない支部間の調整、旧支部間の資金の配分、理事定数など

◆7 月 18 日全国理事会報告

7 月 18 日（日）に zoom 開催された日本ロシア文学会理事会につき、関西支部会員に関連する事項を支部長よりご報告申し上げます。
① 今年度の全国大会は、筑波大学を開催校として、全面オンライン方式で開催されます。日程は、10 月 29 日（金）プレシンポジウム、10 月 30 日（土）―31 日（日）本大会です。詳しくは今後の学会 HP、また 9 月以降に郵送予定の大会資料集をご覧ください。なお本年は、会長選挙が実施される年度に当たります。
② 国際ドストエフスキー協会主催第 18 回国際ドストエフスキー・シンポジウム（2022 年 3 月 4 日―8 日に名古屋外国語大学で開催予定、日本ロシア文学会共催）への発表申し込み期限が、当初の 7 月 31 日から、8 月 20 日に延長されます。希望者は 8 月 20 日までに以下のサイトから発表申請と会員登録をし

てくださるよう、よろしくお願いいたします。
https://dostoevsky.org/
③　会員の情報変更が、全国事務局と各支部事務局とで円滑に共有されていない問題が指摘されました。今後情報の整理が行われ、対策が検討されますが、当面、住所・連絡先等、メールアドレス、所属機関や支部に変更があった方は、できるだけ早期に全国事務局と所属支部事務局とにご連絡ください。
④　来年度に向けて、学会 HP の大幅な更新が予定されていますので、事務局や広報委員会からの連絡にご留意ください。
⑤　学会費（全国）の支払いがまだの方は、よろしくお願いいたします。

＊以下に、研究発表の報告要旨を掲載しています。

研究発表の報告要旨

ロシア語の斜格主体と状況語“ｐｒｉ ｖｉｄｅ＋生格”の意味上の主体との同一指示について

中野悠希　〔同志社大学〕

規範文法によれば、副動詞の意味上の主体は、主文の主格主語と同一指示を持つ（合致する）必要がある。したがって、(1) ***У собаки, видя мясо,*** появляется слюна.「犬は肉を見て唾が出る」のような例は文法的に誤っていると見なされる。しかしこの例は、述語派生名詞を含む状況語 при виде「～を見て」を使って (2) ***У собаки при виде*** мяса появляется слюна. と言い換えれば適格となる。本報告では、при виде の意味上の主体と斜格主体との合致が実現する仕組みを考察した。

преследование волка「狼の追跡」の意味が「狼が追跡すること」とも、「狼を追跡すること」とも取れるように、述語派生名詞の意味上の主体の解釈は一定しない。このため、副動詞と、述語派生名詞を用いた類似表現とでは一般にふるまいが異なる。例えば、副動詞 выйдя「出て」を使った例では、副動詞の意味上の主体は一義的に主格主語に決まるが、その類似表現である状況語 при выходе を使った例では、述語派生名詞の意味上の主体が主格主語と合致するとは限らない。しかし、状況語 при виде については、副動詞と同じく、その意味上の主体と合致する成分を必ず同じ文の中に要求し、かつ意味上の主体が必

ず主文の主体（典型的には主格主語）と合致する。なぜなら、при виде は動作や状態（変化）の同時性・継起性だけでなく、その因果関係を表すからである。主文の主体の動作ないし状態（変化）の原因となる知覚（この場合は視覚）は、主文の主体本人しか経験し得ない。

しかし、例 (1)、(2) で示したように、при виде の意味上の主体は、副動詞の場合とは異なり、主格主語だけでなく斜格主体とも合致する。発表者が 20 世紀以降の言語資料を対象に行ったコーパス調査では、при виде の意味上の主体が主格主語と合致しない例が 800 例以上確認されており、при виде の意味上の主体が斜格主体と合致する用例の容認度が副動詞の場合に比べて遥かに高いことは明らかである。こうした用例では、斜格主体はいずれも人物か動物で、その身体・精神に起こる出来事が叙述されている。述語派生名詞 вид が表す「見る」という動作（知覚）が人間や動物に特有であることを踏まえれば、これが物を表す主格主語ではなく人間や動物を表す斜格主体と結び付くのは当然と言える。ここから、при виде の意味上の主体と斜格主体との合致は意味構造のレベルで実現していると考えられる。

［主語—述語］という統語構造上の二項対立に対応する意味構造上の二項対立を［主体—叙述特徴］とおくと、例 (2) の意味構造は［主体（у собаки）—叙述特徴（появляется слюна）］と分析できる。при виде は統語構造上で述語を修飾しつつ、意味構造上は叙述特徴を修飾しており、その意味上の主語は叙述特徴を通して主体と合致すると考えられる。一方、副動詞の意味上の主体と合致する成分は、統語構造のレベルで、つまり述語を通して主語に決まる。副動詞と述語の結び付きが強いのは、副動詞が「二次述語」と呼ばれることもあるように、主文の述語に準ずるはたらきを持つためである。一方、при виде は単なる状況語で、主文の述語に匹敵するはたらきは持たない。したがって主語や述語との結び付きが弱く、意味構造上の斜格主体と容易に結び付くことができる。

『プストゼルスク文集』ニジェゴロド写本について

青山忠申（京都大学大学院博士課程）

1999 年にモスクワのロシア国立図書館によって収集された『ニジェゴロド文集』と呼ばれる古儀式派文献は、

ルィコフによって詳細に記述されている。この文集の内容は、17 世紀後半にプストゼルスクに幽閉されていた長司祭アヴァクム、司祭ラーザリ、輔祭フョードル、修道士エピファーニイの著作が収められた『プストゼルスク文集』ドルジーニン写本の正確なコピーと、「司祭ラーザリによるキリストの十字架についての証言」と題された、これまで知られていなかったテクストで、1708 年に作成されたものである。この文集が 18 世紀初頭に作成されたことや、構成や順序の一致から、写本系統の上でこの文集がオリジナルであるドルジーニン写本と極めて近い位置関係にあることは明白である。また、これまでにドルジーニン文集の内容を完全に再現した写本が知られていなかったことからも、この文集の重要性がうかがえる。他方、ユヒメンコは 2013 年の論文の中で、ドルジーニン文集がヴィグ共同体のもとに渡り、その地で書き写されていったと主張している。しかしこの主張にはニジェゴロド写本の存在が考慮されていない。本発表では、ドルジーニン写本とニジェゴロド写本の系統的な近さを踏まえた上で、両写本に現れる語形やアクセントを比較し、転写本に書写の元となった写本の影響がどのような形で表れているのかについて考察した。これによって書写の際に写字生がオリジナルの文献のどのような要素を重視し、また逆にどのような要素を修正の対象だと見なしていたかという写字生の意識を明らかにすることを目的とする。

デムコーヴァが列挙しているように、これまでに『アヴァクム自伝』A 系統の完全な写本はオリジナルを含めて 21 写本が知られていた。ユヒメンコによれば、少なくともそのうちの 10 写本がヴィグ共同体で書かれ、それに加えて 2 写本がヴィグ共同体と密接なつながりを持つポモーリエ派の共同体で書かれた。ヴィグ共同体の写本のうち、最も早い時期のもので 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて成立した。ユヒメンコはそれ以外の写本が 19 世紀以降に書かれたことに触れ、ヴィグ共同体の写字室がこの文献の写本の伝統を継承するのに主導的な役割を果たしていたことを強調している。とはいえ、早い時期にドルジーニン文集自体がヴィグ共同体にもたらされたと考えるべきではない。それを裏付ける根拠のひとつがニジェゴロド写本の存在である。ルィコフによれば、ニジェゴロド写本の筆跡がヴィグのものとは異なることから、ユヒメンコ自身がこの写本がヴィグ共同体で作成されたものではないと結論付けている。ルィコフは、ニジェゴロド写本がモスクワにもたらされる前にニージニイ・ノヴゴロドにあったことから、この写本が作成されたのもその周辺、つまりケルジェネツの古儀式派共同体であると推定している。この文集は 18 世紀初頭に作成され、構成や作品の順序もドルジーニン写本とほぼ一致している。ニジェゴロド写本がドルジーニン写本から直接写されたにしろ中間の写本が存在するにしろ、両写本が系統的に非常に近い関係にあることは間違いない。そうなると、1700 年前後にドルジーニン写本がヴィグ共同体にあったと考えるのは難しくなる。

ニジェゴロド写本の筆跡については、87 葉裏、つまり『正教徒の回答』の途中を境に大きく変わっている。しかしそれ以降は目立った筆跡の差異はない。ニジェゴロド写本では、гораздо→гораздно、молыти→молвити、петь→веть、десет→десят、осетрофъ→осетро*в* のように、写し手の規範意識に基づく、あるいは写し手の言語使用が反映された語形の修正がなされる場合があるが、アヴァクムの方言的特徴であると考えられる二人称単数形の покорисся がそのまま書かれるなど、基本的には元の語形がそのまま保たれている。一方アクセントについては、ドルジーニン写本は当時の慣用からして規範的でないアクセント記号の使用が多いことで知られており、ニジェゴロド写本ではほとんどの場合そういったアクセントは規範的なものに修正されている。本発表ではニジェゴロド写本にオリジナルのアクセントが反映された例として、ザリズニャークによって стоя グループと呼ばれる一部の移動型アクセントパラダイムの動詞の-а, -я で終わる副動詞形と на＋人称代名詞対格短形を検討した。ドルジーニン写本においては、アヴァクムが書写した箇所に стоя グループの副動詞が現れるが、いずれも第一音節にアクセントが置かれている。ニジェゴロド写本では前半に語尾アクセント、後半に語頭アクセントが集中している。これは、ニジェゴロド写本の写し手の стоя グループの標準的なアクセントは語尾アクセントであり、当初はドルジーニン写本に現れる語頭アクセントを修正していたが、次第にアヴァクムが意図的に語頭アクセントを使用していることに気づき、オリジナルのアクセントを尊重してそちらに合わせるようになったのだと考えられる。на＋人称代名詞対格短形については、ドルジーニン写本では、前半の書き手が代名詞アクセント、アヴァクムとエピファーニイが接頭辞アクセントを用いており、ニジェゴロド写本でも概ねそれを踏襲している。ニジェゴロド写

本において 95 葉裏、126 葉裏等で接頭辞アクセントが現れていることから、この写し手にとっての標準的なアクセントが接頭辞アクセントである可能性もあるが、断定はできない。重要なのは、オリジナルのアクセントに合わせてアクセント位置を変えている点である。写し手や対象の語形によって程度の差はあるが、アクセントに関してオリジナルを保持しようとした痕跡がうかがえる。今回検討した例についていえば、ニジェゴロド写本の写し手は書写元の写本の書き手による単純な書き間違いだと判断したものは修正の対象としたが、その書き手が意図的に用いていると見なした形式は極力書写の際に反映させようとしたのではないかと考えられる。

プーシキン『青銅の騎士』における間テクスト性について：デルジャーヴィンとラジーシチェフの作品の想起を中心に

杉野ゆり（桃山学院大学）

本発表は、昨年 12 月 1 日、プーシキンスキイ・ドム主催のヴァツーロ生誕 85 周年記念国際会議（オンライン）における発表「プーシキン『青銅の騎士』におけるデルジャーヴィンの想起」に新たな資料と考察を加えて、先の発表を継承しつつ発展させている。

『青銅の騎士』（1833）は、歴史書の重要性を「民族の聖書」や「航海者の海図」に譬えたカラムジンの『ロシア国史』（1818-1824）の序の理念に従って創作されているが、さらにデルジャーヴィンおよびラジーシチェフの作品の想起が存在する。『青銅の騎士』とデルジャーヴィンの詩の関係性を論じた先行研究にはプムピャンスキーとヴィロライネンの論考があり、前者は『青銅の騎士』における 18 世紀の頌詩の文体論的特徴を分析し、青銅の騎士像がエヴゲーニーを追跡する箇所に『滝』（1794）の響きがあることを指摘している。後者は青銅の騎士像の描写に『滝』第 39 連の想起があること、また追跡場面にオシアン的雰囲気を見出している。これらの先行研究に加えて、杉野は、序詩における「ネヴァ川の堂々とした流れ（Невы державное течение）」からデルジャーヴィンの想起が始まり、作品世界全体を貫いて流れ、最後の場面で彼の辞世の詩『時間の流れ』が響いていると考える。中でも、獅子に跨ったエヴゲーニーが洪水に遮られてフィアンセに会えない場面（以下『青銅の騎士』第 1 部 124～163 行の同場面を「場面 A」と表記）は重要である。1829 年以降のプーシキンのテクストでは「獣（зверь）」が叛乱暴動、伝染病、狂気のイメージを宿している使用例があり、この変換コードを用いると、場面 A には、1830 年秋のボルジノでコレラ禍のため閉じ込められ、フィアンセと会えなかったプーシキン自身の体験が投影されている。しかも、場面 A はデルジャーヴィンが詩『妻との出会いを遮る障害』（1807）で描いた状況と視覚的な構図が一致し、同場面の「我々の人生は/すべてむなしい夢にすぎないのか。/…」というモノローグにはデルジャーヴィン『滝』第 55 連から取られた「我々の全人生は/空虚な空想」という思想が響いている。場面 A におけるデルジャーヴィンへの想起は、彼の詩『滝』と同様に『青銅の騎士』の作品世界に夢の重層構造が存在し、19 世紀の物語下で、『滝』が歌う 18 世紀の歴史が展開していることを暗示している。『滝』は、この世の無常を詠むとともに、エカテリーナ女帝治世下の英雄たちの軍功を歌い女帝を称えた頌詩であり、勝者の側にいる人々の栄光を歌った作品である。

デルジャーヴィンは支配階層にとって耳に痛いことも書いた詩人だが、基本的に皇帝に忠実な臣民であり、『青銅の騎士』と同時期に執筆された『プガチョフ叛乱史』には、官軍の有能な将として叛徒らを容赦なく鎮圧した様子が詳述されている。プーシキンは『叛乱史』の注釈で、デルジャーヴィンがビービコフ司令官を悼んだ詩『ビービコフの死に』を紹介しているが、同詩ではプガチョフが「狂暴な虎」に譬えられている。この比喩には、後述するように、18 世紀を代表する啓蒙思想家ヴォルテールの影響が見られる。

また場面 A には、国事犯ラジーシチェフの詩『18 世紀』（1801-1802）の一部も投影されている。同詩は、プーシキンが亡くなる前年に書いた論文『アレクサンドル・ラジーシチェフ』（1836）に「ラジーシチェフの優れた詩」として引用されている。同詩では革命や戦乱が頻発した 18 世紀の暗黒の歴史が、渦巻く血流と難破船で象徴的に描かれ、渦の中にピョートル大帝像とエカテリーナ 2 世像が屹立している。ラジーシチェフが描いた『18 世紀』の凄惨な光景は、デルジャーヴィンの『滝』で詠まれた勝者たちの歴史とは異なっている。場面 A における両詩人の作品の想起は『青銅の騎士』の作品世界を貫く 2 つの伏流であり、18 世紀史の栄光と暗黒を示している。荒れる海に 2 つの像が屹立する

『18 世紀』の構図は『青銅の騎士』の場面 A の構図に視覚的に一致する。プーシキンは『青銅の騎士』でしばしば視覚的効果を狙った創作手法を用いており、場面 A に『18 世紀』を投影すると、作品全体に組み込まれた重要な下部テクストであるヨハネの黙示録の 2 つのエピソード、バビロンの大淫婦の話と偶像崇拝にふけった 2 匹の獣の物語を場面 A に読みとることが可能になり、秘められた皇帝批判が浮かび上がる。しかも、前者のエピソードは『神曲』地獄篇第 5 歌で愛欲のため罰を受けている女帝セミ―ラミスにまつわるエピソードとも関係性がある。

プーシキンの『アレクサンドル・ラジーシチェフ』は、ラジーシチェフに対する称賛と批判が入り混じり、執筆意図を巡って研究者の間で論争が絶えない論文だが、プーシキンがラジーシチェフの人生と著作について書き遺しておきたかったことは確かである。杉野は、同論文が『青銅の騎士』の外部にあって『青銅の騎士』の注釈をしていると、以下3つの理由で考える。第 1 に、エカテリーナ女帝に反抗するラジーシチェフの過激な姿が、青銅の騎士像に挑戦するエヴゲーニーを想起させること、第 2 に『青銅の騎士』で重要な役割をしている「獅子」に対比された「虎」の比喩の存在、第 3 に、場面 A の解読のヒントになるラジーシチェフの『18 世紀』が紹介されていることである。第 2 点について付け加えると、恩赦後のラジーシチェフの思想の変化が、「かって巨大なミラボーの獅子の吠え声に魅了されたことのある彼は、ロベスピエールという、この感傷的な虎の賛美者になりたいともはや思わなかった」と表現されている。

デルジャーヴィンはプガチョフを「虎」に譬えたが、ラジーシチェフは著作で、私憤をまじえて憎悪の対象を呼ぶときに「虎」の比喩を使用している。たとえば、『ペテルブルクからモスクワへの旅』(1790)で農奴制を維持する権力を「虎の権力」と名付け、流刑地で書かれた『人間、その死と不死について』(1809 年公刊)では、罪人に強制力を行使する立法者を「虎」と呼んでいる。プーシキン周辺の「虎」の表象を集めたロートマンの研究によれば、「虎」に関する概して否定的なイメージの成立にはヴォルテールの影響が見られる。ヴォルテールは『寛容論』(1764)で理性に欠けた狂暴な人間を「虎」に譬えている。

プーシキンの論文『アレクサンドル・ラジーシチェフ』における「獅子」と「虎」の対比的な比喩は、デルジャーヴィンとラジーシチェフによる「虎」の比喩の使用、および彼らを取り囲んだ 18 世紀文化を想起させるとともに、「虎」と「獅子」の寓意的な意味の差違を浮かび上がらせることで『青銅の騎士』の獅子像の重要性と象徴性についても示唆している。『青銅の騎士』に取り入れられた数々の作品は、その微かな関係性が動物の比喩や象徴性を使って暗示されている。動物の形象で特に重要な役割を担っているのが、非ロシアや反逆者、第 2 の権力を象徴する獅子の形象である。これは、プーシキンが彼の作品群に張り巡らしたアレゴリー構想において『大尉の娘』第 11 章のエピグラフを創作し、同エピグラフでプガチョフを「獅子」に譬えていることから理解できる。

以上のように、『青銅の騎士』の作品世界では聖書と『神曲』が語る世界史の壮大な流れに加えて、18 世紀ロシア文学のカラムジン、ラジーシチェフ、デルジャーヴィンの作品の想起が存在し、それらはせめぎあいながら 18 世紀史の諸相を語っている。エヴゲーニーの死を描いた最後の場面は、全ての歴史的事件が水流の夢のように過ぎた後の光景である。ここではデルジャーヴィンの『時間の流れ』が通奏低音のように響いている。

レスコフ『不死身のゴロヴァン』における「贈与」の問題

京都大学大学院博士課程
深瀧　雄太

ロシア文学史上 H.C. レスコフ (1831-1895) は「最もロシア的な作家」(M. ゴーリキー)、また「民衆生活の知悉者」などと評価されてきた。この評価は、一般的な言説としてのみならず、レスコフ研究においても前提となり、かつ帰結となってきた面があるように思われる。だが、レスコフの文学作品は本当に以上の枠組みで理解しきれるのだろうか。

以上の問題意識に基づく本報告では、1880 年代前後からレスコフが集中的に描き出した人物形象「義人」(праведники) に着目した。「義人」に関して様々な研究者が独自の定義を与えているが、それらを概括すれば、

「義人」とは「道徳的傾向」「自己犠牲的」「善良さ」が特徴な、肯定的人物像だといえる。

1879年から80年にかけてレスコフは「義人」を取り上げた作品を複数執筆し、80年にはそれらをまとめた作品集も刊行した。作家はこの作品集の序文で、A. ピーセムスキーの悲観的社会観（「ロシア社会には『ゴミくず』(дряни) しかない」）に対峙すべく、「欠いては町も成り立たない」という「三人の義人」を探し出すと宣言した。以来、「義人」の描出は 80 年代のレスコフの関心であり続けた。レスコフの創作理念を凝縮した人物像である「義人」は、作家の創作の核心を構成する重要な要素と考えられる。

「義人」を描いた作品は複数あるが、研究者 Б.Я. ブーフシュタブは、短編『不死身のゴロヴァン』(Несмертельный Голован, 1880) の主人公ゴロヴァンがその典型例だと指摘している。これにならい、報告では左記の短編を取り上げ、「義人」と位置づけられるゴロヴァンの人物像を分析した。また、この人物がいかなる価値体系を表出した人物なのかを考察した。作品分析に際しては、先行研究で言及されてきた二つの論点 (a) ゴロヴァンの善良な人物像、(b) 作中に見られる信仰／宗教の描写を手掛かりとした。

論点 (a) に関して、研究者 И.В. ストリャローヴァは、ゴロヴァンが「自己犠牲的な援助」を行っている場面（作中5章「疫病に罹った者のぼろ家に臆することなく入っていき、感染者に、新鮮な水ばかりか、（…）取れたてのミルクも飲ませてやって（…）」）に着目した。また米国の研究者 H. マクリーンは「食べ物を与える」点にゴロヴァンの善良さを見いだした（作中 7 章冒頭）。

こうしたゴロヴァンの行動は、見返りを求めない行動という点で「贈与」的である。ただし、贈与論の先駆者 M. モースによれば、見返りを求めない贈与というのはありえず、贈与は必ずや交換へと帰着する。翻って、ゴロヴァンの「贈与」は無私無欲のものといえるだろうか。この点は、第三者（「私」）による語りという構造上、明確に示されることはない。また、ゴロヴァンの「贈与」的行為である「病人の看護」に対する返礼も確認することができない。病気に罹った病人が死の運命にあることが、作中で語られているのである。

ところで、ゴロヴァンの「贈与」的行為について注目すべきは、それが彼にとってなじみのない人間に、すなわち柄谷行人の言う〈他者〉になされたものであるということだ（柄谷「世界宗教をめぐって」『探求 II』）。ゴロヴァンの〈他者〉志向は、彼の共同体意識の希薄さを示唆していると考えられる。そのため、ゴロヴァンには「贈与」的行為が見られるが、彼の為す「贈与」は、共同体内部で行われる互酬的贈与や、モース的贈与交換モデルでは捉えきれないものである。なお、ゴロヴァンは「贈与」のみならず、市場での商品交換（酪農経営とクリームの販売）も行っているが、この点にも彼の〈他者〉志向が表れている。

ゴロヴァンとは対照的に、彼を取り巻く民衆においては、共同体意識に基づく互酬的贈与観が支配的である。その証拠に民衆は、壊疽した足を切り落とすゴロヴァンの行動（作中6章）を呪術的に、つまり「ゴロヴァンは供物 жертвица/жертва として足の肉片を投げ込み、疫病の鎮静化を祈願した」と解釈している。民衆の側は彼を、奇矯でありながらも共同体のために尽くす〈異者〉の位相に置いているといってもよい（『探求 II』）。

次いで論点 (b) に移り、ゴロヴァンの形象が、作中に見られる様々な信仰／宗教の描写といかに関わっているのかを考察した。作中 7 章冒頭で、民衆が個々の信仰に応じた共同体を築き、自閉する一方、ゴロヴァンはそのいずれにも帰属せず、しかし関わりを絶つわけでもないという様子が対比的に示されていた。自由に行き来するゴロヴァンの姿は、共同体的意識に基づく信仰形態を相対化しているとみることができる。

再び柄谷の議論では、宗教は「共同体の宗教」と「世界宗教」（『探求 II 』）に分けられる。「世界宗教」はのちに「普遍宗教」とも呼ばれるようになるが（柄谷『世界史の構造』）、「普遍宗教」は、「贈与」（交換様式）の内在という点を強調する文脈で特に用いられている。

ゴロヴァンの〈他者〉志向に基づく「贈与」行為は、「普遍宗教」の特徴とも符合する。ゴロヴァン自身の信仰形態には曖昧な点があるが、彼の人物形象それ自体は、「普遍宗教」の理念を体現したものとして描かれている。作中 8-9 章では、聖人の列聖、またそこで生じた偽りの「奇跡」に熱狂する民衆の姿が描かれており、マクリーンはこれを「諷刺的な光景」と評価した。1880 年当時、レスコフ自身が反正教会的な立場にあったこと、また彼が「神官たちによって堕落させられる」以前の信仰形態、すなわち「普遍宗教」を志向していたこと（1883年10月 A. スヴォーリン宛の書簡より）もふまえれば、確かに上述の場面は、共同体の宗教としての正教会に対する諷刺と

いえる。『不死身のゴロヴァン』の発表年と書簡の間には 3 年のブランクがあるが、この期間でレスコフの立場が激変したという指摘は見られない。そのため、83 年に言明されたレスコフの志向が、80 年の時点で既に現れていたと考えても差し支えないと判断した。

結論として、①ゴロヴァンには〈他者〉を志向した「贈与」行為が見られること、②ゴロヴァンは「普遍宗教」の理念を体現した形象であること、③「普遍宗教」の理念の提示は、作家の正教会批判とも通底していることを述べた。おわりに、レスコフの「ロシア」的「義人」像が、実際には脱共同体的な志向を有している可能性を仮説として提示した。